

宮崎県埋蔵文化財センター所蔵の石臼からみえてきたもの

谷口 晴子

（宮崎県埋蔵文化財センター）

1 はじめに

何故、今、石臼について知りたいと思ったのか。私が所属する普及資料課の業務のひとつに宮崎県埋蔵文化財センター（以下、センター）分館内の展示業務がある。年に数回展示替えを行うのだが、私は某遺跡の出土品である石臼片を茶臼と気づかずに展示してしまった。別の職員からの指摘により事なきを得たが、いくら破片といえども茶臼と粉挽き臼の見分けがつかないとはなんたることだ。専門外と言えどもそれまでだが、せめて見分けがつくくらいには理解したい、そう思い立ったのが動機のひとつである。

まずは実物を見てみよう、とセンター所蔵資料を観察することから始めた。収蔵資料のリスト上では全部で84点の石臼を所蔵していた。茶臼限定で進める予定だったが、報告書によっては粉挽き臼・茶臼の分別がないものもみられたため、全点確認することにした。センター所蔵分という恣意的な資料区分であるが、今後につながるよう雑感を記した次第である。

2 資料検討の方法について

センター所蔵の石臼は、未報告資料も含め32遺跡から84点出土している。内訳は粉挽き臼39点、茶臼26点、「不明石製品」として報告されているもの1点、未報告18点である。

実見の結果、粉挽き臼50点、茶臼33点、石臼以外（砥石か）1点とした。詳細は表1・2に記している。

（1）計測値・各部名称・上下分別方法について

粉挽き臼の各部名称については三輪茂雄、茶臼については桐山秀穂の名称を踏襲する（三輪1978・桐山1996）。また、臼面直径は報告書に記載がない事例が多く、その場合は筆者が計測を行った。分画については一分画の外周から中心角を割り出し、角度から分画数を算出した。例えば、中心角が60°の場合は $360 \div 60 = 6$ 分画、といった具合である。残存率については、周縁付近（側面）しか残存していない場合、外周から中心角を計算し、全周に占める割合を残存率として記した。そのため、周縁付近のみの破片である場合、正確な数値とはいえない資料もある。後述するが、石臼廃棄時の破碎行為に関し、何分割に割るのか何らかの規則性があるのではないかと思い、このような計測方法をとった。

臼の上下の分別は、粉挽き臼は芯棒受け、供給孔、側面に挽手孔のいずれかが確認できるもの、これらの部分が破損している場合は、臼面にもくぼりの痕跡、臼面の反対面に上縁やくぼみが確認できる場合は上臼とした。下臼は供給孔がないもの、または中央に芯棒孔があるものを下臼とした。これらの特徴が破損により確認できない破片は上下不明とした。

茶臼は、粉挽き臼と大きく構造が異なり、全体像がつかめれば粉挽き臼との分別は容易である。まず臼面径は20cm前後と粉挽き臼と比べ小さい。上臼は供給孔（軸穴）が臼面中央にあり、臼面の反対面に上縁・くぼみの有無、側面に挽木孔および台座文様の有無で判断した。下臼は受皿が作り付けられた独特の形状をしている。

石材同定については、当センターの松田清孝が行った。

(2) 粉挽き臼について

本論の対象となった石臼片 83 点中、粉挽き臼は 50 点確認された。出土遺跡の性格は、集落跡、城館跡、屋敷地、水田跡等がみられる。出土遺構は、遺構外 15 例、道路状遺構 12 例、掘立柱建物跡・柱穴 8 例、水路跡・溝状遺構 5 例、曲輪 3 例、不明遺構 3 例、墓 1 例、井戸 1 例、中世の集石遺構 1 例、古墳時代の住居跡 1 例であった。遺構の時期はおおよそ中世から近世に収まる。本論は石臼の構造・使用石材や廃棄にともなう傾向を把握することが目的のため、年代についてはこれ以上の言及はしない。

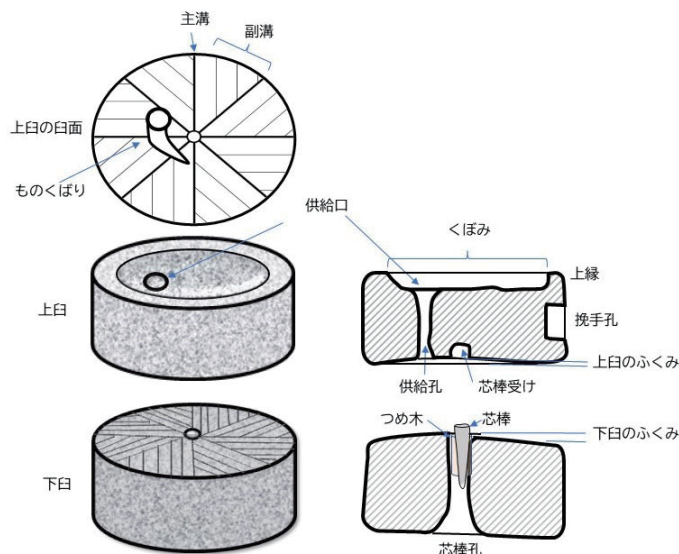


図1 粉挽き臼の各部名称 (三輪 1978 より改変)

臼の上臼・下臼の分別は、粉挽き臼 50 点中、上臼 35 点、下臼 9 点、上下不明 6 点であった。不明の 6 点を除いた石臼全体の約 80% が上臼であった。また、完形は 2 点のみで、96% は欠損品であった。

上臼の多さについては、神奈川県下出土石臼の検討を行った小池聡によると、下臼の上を回転運動して機能する上臼の方が臼作業面の消耗度は激しいとされ、何度も目を切り直し、使用不能になるまで使い廃棄したものが多いためとされる (小池 2000)。センター出土資料の上臼 35% にあたる 12 点も臼面は摩耗し、目が確認出来ない状態であったことから、使用不能になったため廃棄されたと考えられる。

これに対し下臼は、消耗の割合が低いとされる (小池 2000)。センター出土資料の下臼臼面も、目つぶしされたもの以外はまだ使用可能状態で、上臼ほど消耗されていない様子がうかがえる。これらのことから、消耗し使用不可能となった上臼は廃棄され、下臼は使用可能であったものの場合によっては目つぶし等を行い、セットで使用していた上臼と共に廃棄されたと考えられる (小池 2000)。ただしセンター出土資料は、上下の出土割合に大きく差が認められることから⁽¹⁾、使用不能となった上臼のみ廃棄、下臼は上臼を交換し、そのまま使用し続けた場合もあったと推測される。

次に石材別にみていくことにする。粉挽き臼 50 点中 阿蘇溶結凝灰岩製 33 点 (12 遺跡、全て阿蘇 4)、砂岩製 15 点 (11 遺跡)、不明 2 点 (1 遺跡 実見不可) であった。阿蘇溶結凝灰岩は、宮崎県では主に五ヶ瀬川・五十鈴川の周辺にて産出される岩石である。そのため出土遺跡の所在地は延岡市・日向市・日之影町の県北地区 4 遺跡で 26 例と大半を占めた。そのほか数は少ないが、宮崎市 3 遺跡 4 例、児湯郡川南町 2 遺跡 2 例、児湯郡高鍋町 1 遺跡 1 例、そして都城市の高樋遺跡にて 1 例出土していることから産出地である県北地域以外にも広く県内に流通していたことが認められる。

一方で、砂岩は全て四万十累層群のもので、県内各地で産出する身近な石材である。出土遺跡の所在は宮崎市 8 遺跡 9 例、西都市 1 遺跡 3 例、新富町 1 遺跡 1 例、川南町 1 遺跡 1 例と宮崎市内と児湯郡域に集中した。この出土地域の偏りが何を意味するのか、母数が少ないためあまり憶測を述べるのは避けたいが、興味深い結果である。

最後に臼の破碎状況について考える。堀田孝博、小池聡が指摘するように出土石臼の9割以上が破碎しているも関わらず、接合資料が少ない、1/2または1/4に分割し廃棄された可能性が高いことから、廃棄時に何らかの意識が働いているとされる（堀田1998・小池2000）。こうした現象は、不要となった粉挽き臼を「魂抜き」と称し、二つに割って廃棄する行為（三輪1978）ではないかと考えられている。以下、上下別・石材別に検討する。

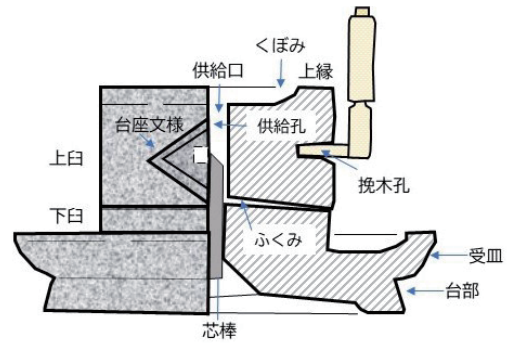


図2 茶臼の各部名称（桐山1996より改変）

上臼は、阿蘇溶結凝灰岩26点・砂岩9点が出土しているが、砂岩製上臼は最小破片の残存率が約1/4であるのに対し、阿蘇溶結凝灰岩製上臼は3/40と上臼の割られている大きさも後者の方がより細かく割られる傾向がみられた。

下臼は、阿蘇溶結凝灰岩製石臼（2点）の残存率は1/4、砂岩製（7点）は高岡麓遺跡出土の1/5片と1/4片の接合片が最小であった。下臼は上臼ほど細かく割られてはいないが、臼として使用不能にし廃棄するためか、臼面の目を潰す「目つぶし」行為が行われていた。前原北遺跡（宮崎市）出土の下臼臼面中央にみられる工具で石を抉ったような痕跡や宮ノ東遺跡（西都市）出土下臼臼面に残る敲打痕のようなものがこれに該当する。

（3）茶臼について

茶臼は上臼15点、下臼6点、下臼受皿片12点の計33点出土している。茶臼は、碾茶を抹茶にするための挽き臼であり、その他にも火薬・薬の精製に使用されたとみられている（三輪1978・桐山1996）。一種の茶道具であるため寸法や形状には規矩があり、大きく逸脱することはないと思われる。臼面径も大きく分けて「膝臼」といわれる直径15～16cm内の1群と16～22cm内の1群に分かれる（桐山1996）。センター所蔵資料の茶臼33点中、推定も含め臼面径のわかる17点中、本城跡（城館跡）出土の上臼（図12-70）1点のみが膝臼の径に該当した。ただし、この上臼は未製品なのか臼面は工具痕が残され研磨されておらず、かつ溝が切られていない状態である。それ以外の茶臼は16～22cm内に収まった。特に6～7寸（約18.2～21.2cm）内のものが16点中12点と多数を占める。また、臼面の分面数は判断可能な臼片12点すべて8分面であった。

次に出土遺跡の性格をみてみよう。城館跡2遺跡11例、屋敷地2遺跡5例、寺院跡1遺跡3例、水田跡1遺跡1例、集落跡6遺跡13例と、水田跡以外は支配者層の居住地的な遺跡であり、集落跡も区画溝等で整備された掘立柱建物跡が並ぶ居館的な集落にて出土する傾向がみられた。出土遺構は道路状遺構8例、溝状遺構6例、土坑5例、曲輪2例、柱穴2例、堀切1例、遺構外9例であった。

石材は、33点中30点が砂岩製、阿蘇溶結凝灰岩製2点、花崗岩製1点と圧倒的に砂岩製が多く、全体の90%を占めていた。阿蘇溶結凝灰岩製は塩見城跡（日向市）と曾井第2遺跡（宮崎市）、花崗岩製は林遺跡（延岡市）出土であり、出土地域による石材の偏りは認められなかった。また、粉挽き臼に用いられた砂岩とは、その色味、石英含有量や粒子の細かさ等に違いがみられ、より細かく磨り潰せるよう石材を選別していたと思われる⁽²⁾。

台座文様は上臼片8点にて確認された。二重方形6点、菱文2点の2種類のみ認められた。菱文を有する茶臼2点が出土した遺跡の性格は寺院跡（図9・12-73）と屋敷地（表2-77）で、いずれも時期は近世である。二重方形の茶臼は中世の城館跡（図8-56・57、図12-70）と集

落(図10-81)、近世の集落(図10-79)となった。台座文様は使用者の階層差が現れる(桐山1996)部分ともいわれているが、センター所蔵資料からは、出土遺跡の性格による明確な階層差は認められなかった。ちなみに菱文を有する2点は側面の表面加工や工具痕に共通点が認められることから、同一石工団体が製作した製品とも考えられる。

最後に、茶臼廃棄時の破砕状況について考える。上臼は、15点中完形1点、1/2残存が2点、それ以下の破片は12点であった。下臼は、受皿部の口縁部を打ち欠かれた以外はほぼ完形1点、1/2が2点、1/4が2点、それ以下の破片1点に加え受皿破片が12点であった。特に下臼の破砕状態がただ割るだけでなく興味深い。八幡遺跡出土の下臼(表2・図11-76)は、臼面が削り取られ、台石皿のような状態になっていた。林遺跡・塩見城跡出土の下臼は、受皿部が全周とも意図的に打ち欠いた痕跡が認められる。また、臼面には執拗な敲打痕・目つぶしが認められる。このような通常の使用ではありえない破損がみられることから、廃棄時に意識的な破砕が行われていたと考えられる(堀田1998)。

3 おわりに

センター所蔵資料という恣意的な資料ではあったが、全出土遺物を一堂に集め、資料を比較しながら観察する事で、石製品初心者ながら多くの視点を得ることが出来た。とはいえ未報告資料の図面化や、県内の民俗事例等、網羅できなかった部分も数多くあり、次年度以降も探求し続けてゆきたいテーマである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、貴嶋活実・小吹雅史・小山輝晃・田中敏雄・松田清孝・藤木聡・堀田孝博・本部裕美・山田洋一郎(敬称略、五十音順)の方々に石臼運搬・助言等ご協力頂きました。文末であります但し記して感謝を申し上げます。

註

- (1) 神奈川県下出土の粉挽き臼は総数149点(上臼82点、下臼69点)である。全体の55%が上臼という結果について小池聡は、一対として使用されてきた粉挽き臼は上臼廃棄時点で下臼は目切りによる補正可能状態であっても廃棄されたのではないかと推測している。
- (2) 松田清孝のご教示による。

引用・参考文献

- 三輪茂雄 1978『臼』ものと人間の文化史 25、法政大学出版局 139、235、295 頁
- 桐山秀穂 1996「日本における茶臼の研究」『古代学研究所研究紀要』第6輯、財団法人古代学協会、71-72 頁
- 小池 聡 2000「石臼は何故壊れるかー神奈川県下近世遺跡出土石臼からの考察ー」『竹石健二先生・澤田 大多郎先生還暦記念論文集』、181-193 頁
- 堀田孝博 1998「第5節 神奈川県下出土茶臼について」『下鶴間城山』大和市文化財調査報告書第66集、大和市教育委員会、55-59 頁
- 宮崎県教育委員会 1985『浦田遺跡・入料遺跡・堂地西遺跡・平畑遺跡・堂地東遺跡・熊野原遺跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集
- 宮崎県教育委員会 1985『下田畑遺跡 小山尻東遺跡 田上遺跡 赤坂遺跡 小山尻西遺跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集
- 宮崎県教育委員会 1986『保木下遺跡』新名爪川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財報告書

- 宮崎県教育委員会 1988『熊野原遺跡 A・B 地区，前原西遺跡，陣ノ内遺跡，前原南遺跡，前原北遺跡，今江城（仮称）跡，車坂城西ノ城跡』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第 4 集
- 宮崎県教育委員会 1990『林遺跡』一般国道 10 号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書
- 宮崎県教育委員会 1991『天神河内第 1 遺跡』大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 宮崎県教育委員会 1992『樺山・郡元地区遺跡』年見川小規模河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
- 宮崎県教育委員会 1994『田向遺跡・平谷遺跡』県道向山・日之影線道路改良事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書
- 宮崎県教育委員会 1995『学頭遺跡・八児遺跡』
- 宮崎県教育委員会 1996『高岡麓遺跡』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000a『石用遺跡・友尻遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 22 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000b『上の原第 2 遺跡 上の原第 1 遺跡 上の原第 4 遺跡 白ヶ野第 3 遺跡 A 地区』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 25 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『本城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 60 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003a『上日置城空堀跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 68 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003b『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 70 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 94 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005a『崩戸遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 103 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005b『前ノ田村上第 1 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 116 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2006『銀座第 1 遺跡（一・二・三・四次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 120 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007a『山田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 146 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007b『湯牟田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 152 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007c『野首第 1 遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 157 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007d『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 166 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008a『宮ノ東遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 173 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008b『曾井第 2 遺跡（第一次・第二次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 175 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2009『旭 2 丁目遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 183 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012a『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 210 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012b『飢肥城下町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 220 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2018『高樋遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 243 集

表1 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵粉挽臼の一覧表

報告書番号	所在地 日之影町	遺跡名 日向遺跡	性格 集落	遺構 柱穴	遺構の年代	石け	白面形態	残存率(約)	白面径	高さ(cm)	中心角	赤化	備考
1 未報告						上白	6分面 副溝3本	1/6と1/8の 接合	—	8.5	160	—	上面 供給孔一部破砕
2 160図797				掘立柱建物跡		上白	8分面 副溝3本	1/6と1/8の 接合	(31.0)	8.3	45+60	一部	上縁あり、くぼみ部分供給孔に向かって傾斜 同柱穴内の1/6薄片と1/8を接合
3 160図798				不明遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	3/40	(42.0)	9.2	27		上縁から供給孔に向かって傾斜 阿蘇溶結凝灰岩
4 160図799				掘立柱建物跡		上白	阿蘇溶結凝灰岩	3/7	(32.0)	12.5	157	一部	自然石タイプ 回転時(すりつぶし時)の摩擦痕跡明瞭 上縁平らタイプ くぼみは供給 孔に向かって傾斜する 割れ口 上縁は1/4あたりから割れている
5 160図800	延岡市	山田遺跡	集落	掘立柱建物跡	中世	上下不明	阿蘇溶結凝灰岩	1/7	(31.4)	8.7	53		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
6 未報告				遺構外		上下不明	阿蘇溶結凝灰岩	3/8	(32.3)	8.5	138		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
7 未報告				遺構外		上下不明	阿蘇溶結凝灰岩		—	6.5		一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
8 未報告				不明遺構		上下不明	阿蘇溶結凝灰岩		—	6.5		一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
9 未報告				遺構外		上白	阿蘇溶結凝灰岩	5/9	(38.0)	10.5	198		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
10 未報告	延岡市	林遺跡	集落・水田跡	遺構外	中世～近世	上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/6	(31.2)	7.0	58		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
11 166図1152				遺構外		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/4	(25.4)	5.8	90		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
12 166図1153				曲輪		上白	阿蘇溶結凝灰岩						阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
13 166図1154				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	副溝3本					阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
14 166図1155				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	副溝4本					阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
15 166図1156				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩		—		125		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
16 166図1157				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/6	(36.6)	7.9	60		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
17 167図1158				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/6	(28.0)	10.5	58		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
18 167図1159	日向市	地見城跡遺跡	城館跡	遺構外	中世	上白	阿蘇溶結凝灰岩	2/9	(24.0)	9.8	80		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
19 167図1160				井戸		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/7	(35.8)	55			阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
20 167図1161				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/9	(32.8)	9.0	40		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
21 167図1162				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/6	(32.8)	9.5	60		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
22 167図1163				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/5	(31.0)	7.5	75		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
23 167図1164				道路状遺構		上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/9	(37.2)	9.6			阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
24 167図1165				道路状遺構		上下不明	阿蘇溶結凝灰岩						阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
25 167図1166				道路状遺構		上下不明	阿蘇溶結凝灰岩						阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
26 80図53		中山遺跡	集 散布地	遺構外	近世	上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/2	(25.6)				阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
27 未報告		前・田村上第1遺跡	集落	遺構外	中世～近世	上白	阿蘇溶結凝灰岩	1/7	(27.5)	8.3	55		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
28 81図258	児湯郡川南町	鶴崎第1遺跡 (一・二・三・四・五)	集落	掘立柱建物跡	中世～近世	下白	砂岩	2/5	(28.6)	6.8	140	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
29 81図259			集落	掘立柱建物跡		上白	砂岩	1/4	(28.0)	10.3	90		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
30 134図582	児湯郡高鍋町	湯井田(二次調査) 遺跡	集落	溝状遺構	中世	上白	阿蘇溶結凝灰岩	2/5	(35.6)	10.9	145		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
31 152図483		野首第1遺跡	集落	遺構外	中世～近世	下白	阿蘇溶結凝灰岩	1/4	(23.7)	12.3	90		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
32 216図4133	西部市	宮ノ奥遺跡	集落	溝状遺構	中世	下白	砂岩	1/2	(27.2)	12.4	170	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
33 245図4769			集落	住居跡	古墳	上白	砂岩	3/8	(28.0)	10.9	135	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
34 266図5312	児湯郡新富町	上日置城跡遺跡	城館跡	遺構外		下白	砂岩	5/9	(29.0)	7.9	200		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
35 未報告		小山原東遺跡	散布地	遺構外	中世	上白	砂岩	1/4	(27.0)	7.1	90		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
36 未報告				集石遺構		上白	砂岩	3/8	(26.0)	10.7	163		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
37 未報告		前原北遺跡	散布地・集落	遺構外	中世	下白	砂岩	完形	26.0	11.5	360	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
38 80図5		聖地東遺跡	集落	遺構外		上白	砂岩	完形	30.5	9.0			阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
39 80図6	宮崎市	上の原第2遺跡	集落	遺構外	近世	上白	砂岩	2/3	30.0	11.0			阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
40 未報告		石川遺跡	生産遺跡	水田跡	近世以降	上白	砂岩	3/4(1/2片と 1/4片の接合)	28.6	7.2	180と90	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
41 未報告		本城跡	城館跡	曲輪	中世以降	上白	砂岩	1/4	(27.2)	9.1	84		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
42 49図380		曾井第2遺跡	寺院跡	遺構外	中世以降	下白	砂岩	1/4	(26.8)	10.1	90	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
43 108図550		旭2丁目遺跡	生産・集落	遺構外	近世	下白	砂岩	1/3	(25.5)	6.5	125	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
44 15図25	宮崎市清武町	浦田遺跡	散布地・集落	遺構外	中世～近世	上白	砂岩	3/7	(30.0)	11.4	150	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
45 未報告		天神河内第1遺跡	散布地・集落	遺構外	中世	上白	砂岩	1/3	(30.2)	8.5	123	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
46 133図01				溝状遺構		上白	砂岩	2/5	(23.6)	11.9	143	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
47 147図01				溝状遺構		上白	砂岩	2/5	(23.6)	11.9	143	一部	阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
48 311図92	宮崎市高岡町	高岡遺跡	集落・屋敷地	溝状遺構	近世	下白	砂岩	3/7(1/5片と 本の大溝が重なる)	(25.6)	6.5	75と80		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
49 46図14		学頭遺跡	散布地・集落	遺構外		下白	砂岩	1/2	(26.4)	8.9	180		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
50 70図549	板橋市	高橋遺跡	集落・屋敷地	遺構外		上白	砂岩	2/7	(35.4)	12.0	100		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明
51 18図201	西部市	次郎坂新田遺跡	集落・屋敷地	柱穴		上白	砂岩	2/7	(35.4)	12.0	100		阿蘇溶結凝灰岩 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明 上縁の形状は不明

表 2 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵茶臼の一覧表

報告書番号	所在地	遺跡名	性格	遺構	遺構の年代	石材	白面形態	残存率	台座文様	白面径	受皿径	高さ	備考
51 43回 30	延岡市	林遺跡	集落・水田跡	柱穴	中世～近世	下臼	8分面 副溝9本	1/6		(17.6)		9.1	報告書では石臼 磨砕する主溝に平行な溝が2本、副溝を切る溝に入 れられている。受皿 圓筒的に破砕か
52 165回 1142						上臼	砂岩	1/3		(18.0)			加熱による磨変あり
53 165回 1143						上臼	砂岩	1/4					加熱による磨変あり
54 165回 1144						上臼	砂岩	2/9		(18.0)			加熱による磨変あり
55 165回 1145						上臼	砂岩	2/7		(18.0)			加熱による磨変あり
56 165回 1146	日向市	塩見城跡	城館跡	道路状遺構	中世	上臼	阿蘇凝結凝灰岩	8分面 副溝8本	二重方形	(17.0)		13.9	一部赤化 上面までの高さ10.6cm
57 165回 1147						上臼	阿蘇凝結凝灰岩	8分面 副溝4～6本	二重方形	(18.0)		12.0	全体的に赤化 割れ口3面
58 165回 1148						下臼受皿	砂岩	1/7					全体的に赤化 130片と70片が接合 受け皿口縁部は細かく破砕されている
60 165回 1150						下臼	砂岩	8分面 副溝7本		18.5		11.1	受皿全面破砕 白面に熟粉な好打痕あり 目つぶしか
62 87回 238						下臼	砂岩	8分面 副溝9本		(18.0)		12	一部赤化 台座部分も破砕
63 87回 239						上臼	砂岩	2/7		(19.6)			上臼上唇片 白面文様 供給孔 一部残存
64 87回 240						上臼	砂岩	2/7	二重方形	(19.2)			白面の溝非溝に粗く磨耗している 目を切り直しているか
65 81回 255	川崎市	前ノ田村上第1遺跡	集落	遺構外	中世～近世	下臼受皿	砂岩	1/5					一部赤化 割れ口にタール付着
66 81回 256		銀座第1遺跡 (一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百)	集落	溝状遺構	中世	下臼受皿	砂岩			(16.8)			報告書では受皿片となっているが、径の小ささ、先端部分が直角で あることから上臼片(上縁付近)と判断
67 未報告						下臼受皿	砂岩	1/12		(31.0)			加熱による磨変あり
68 未報告						下臼受皿	砂岩	1/24					加熱による磨変あり
69 28回 164	高橋町	前戸遺跡	散布地・集落	遺構外	中世～近世	下臼受皿	砂岩	1/10		(35.0)			内面に漆? 全体に付着 ただ、割れ口にも付着しているのが断定でき ず
70 未報告		本城跡	城館跡	遺構外	中世	上臼	砂岩	1/2	二重方形	(15.8)		12.2	白面全体に工具痕残る 未製品か
71 29回 15		保木下遺跡	散布地・水田跡	遺構外	中世～近世	下臼受皿	砂岩	1/2		(41.2)			報告書では不明な製品 一部赤化、黒化
72 108回 549	宮崎市	曾井第2遺跡	寺院跡	遺構外	近世	上臼	砂岩	1/9	菱文	(35.6)			報告書では凝灰岩 一部赤化
73 108回 551			寺院跡	遺構外		上臼	砂岩	1/2		(19.6)		12.5	報告書では凝灰岩 一部黒変、黒化
74 108回 552			屋敷地	廃棄土坑		下臼受皿か	砂岩	1/2		(19.6)			一部赤化 報告書では凝灰岩 551と552が
75 未報告			屋敷地	廃棄土坑		上臼	砂岩	1/4					一部赤化 熟変している 一部赤化
76 未報告			屋敷地	廃棄土坑	近世	上臼	砂岩	3/8	菱文か	(18.2)		12.1	白面赤く磨耗 溝の方向で溝が浅く、再刻したものか 側面の加 工が受井第2遺跡出土品と類似 白面に好打痕あり 目つぶしか
77 図版39 267	都城市	八幡遺跡	屋敷跡	廃棄土坑	近世	下臼	砂岩	1/4	—	(38.8)		11.2	一部黒変、断面赤化 白面赤く磨耗し、断面と同様に破砕か?
78 図版39 268		華無遺跡田区	集落	土坑	近世	上臼	砂岩	1/4	二重方形	16.9		11.6	白面磨滅もしくは黒化のため溝は不明
79 82回 702		高橋遺跡	集落	柱穴	近世	下臼受皿	砂岩	1/4	二重方形	(31.6)			加熱による赤化、黒化物付着
80 70回 550		高橋遺跡	集落	溝状遺構 右列	中世	上臼	砂岩	1/4	二重方形	(19.6)		13.4	一部黒変、赤化
81 42回 142	都城市/三股町	柳山・都元遺跡	集落	溝状遺構	中世	下臼受皿	砂岩	1/7		(33.6)			一部黒変、赤化
82 48回 194			集落	溝状遺構	近世	上臼	砂岩	1/7		18.2		(12.1)	一部赤化
83 194回 957	日向市	防犯城下町遺跡	屋敷地	溝状遺構	近世	上臼	砂岩	1/7					

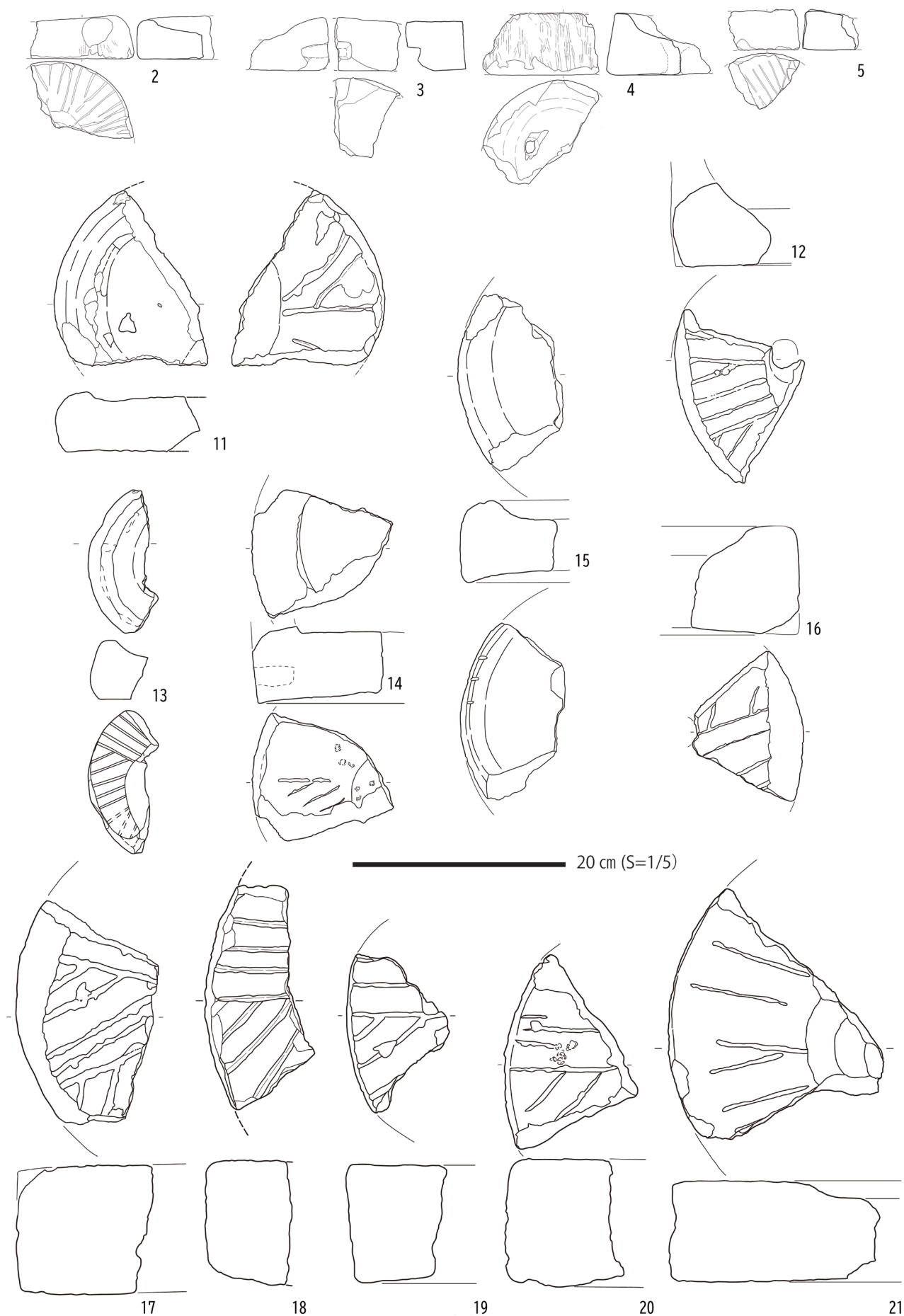


図3 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図(1)

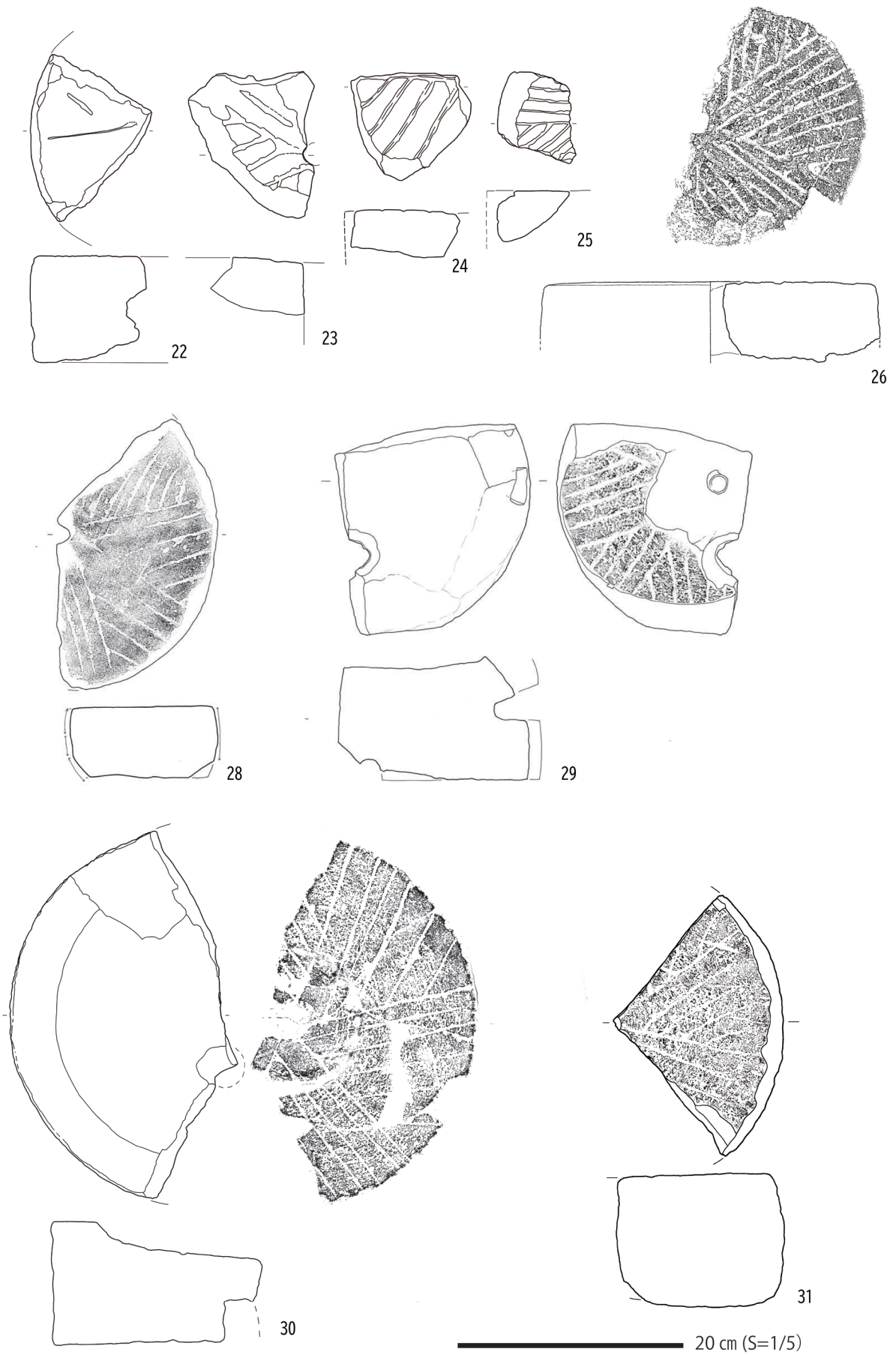
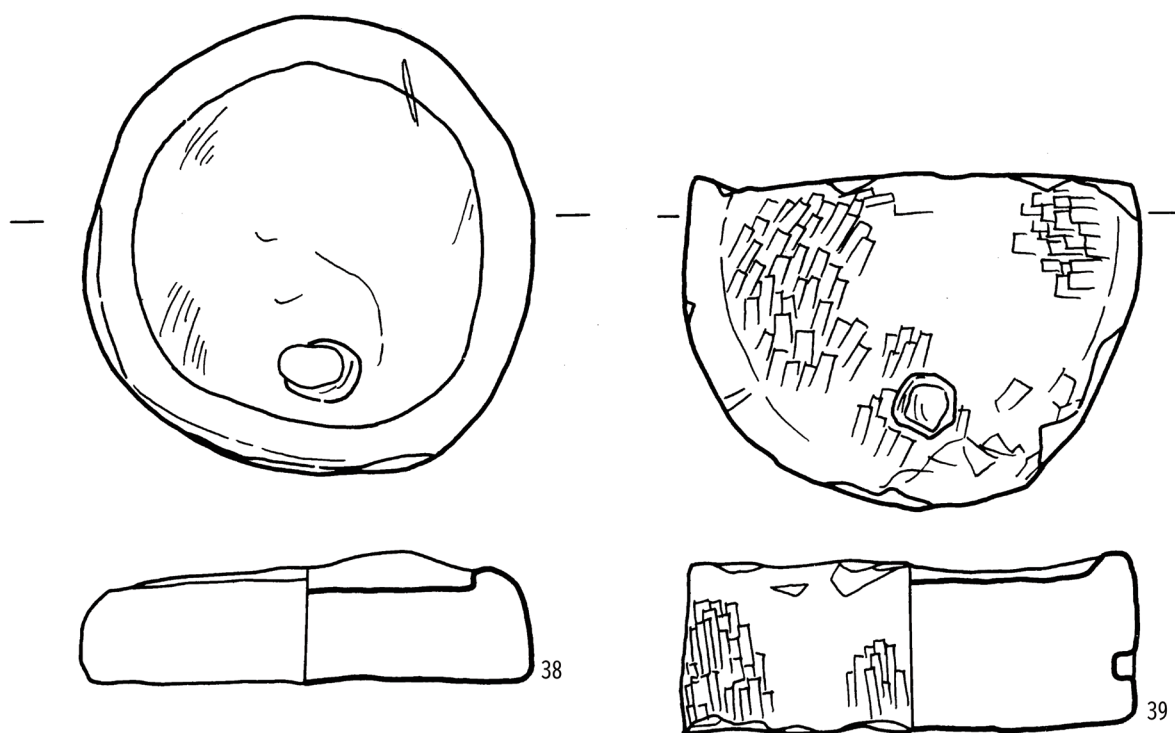
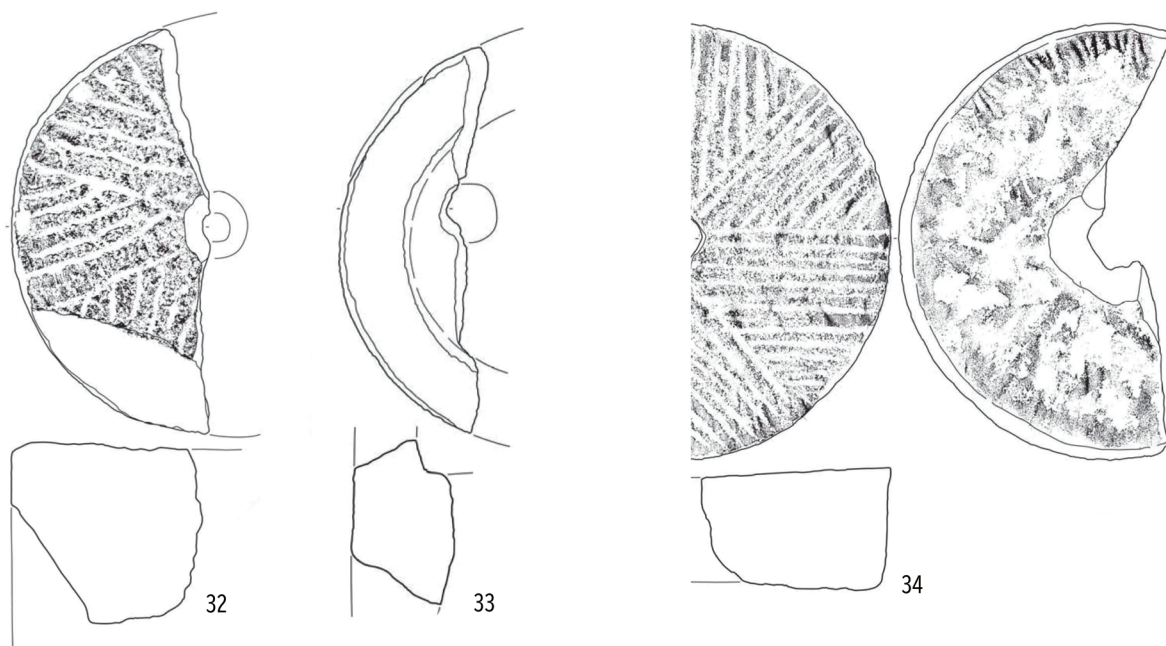


図 4 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図（2）



20 cm (S=1/5)

図5 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図(3)

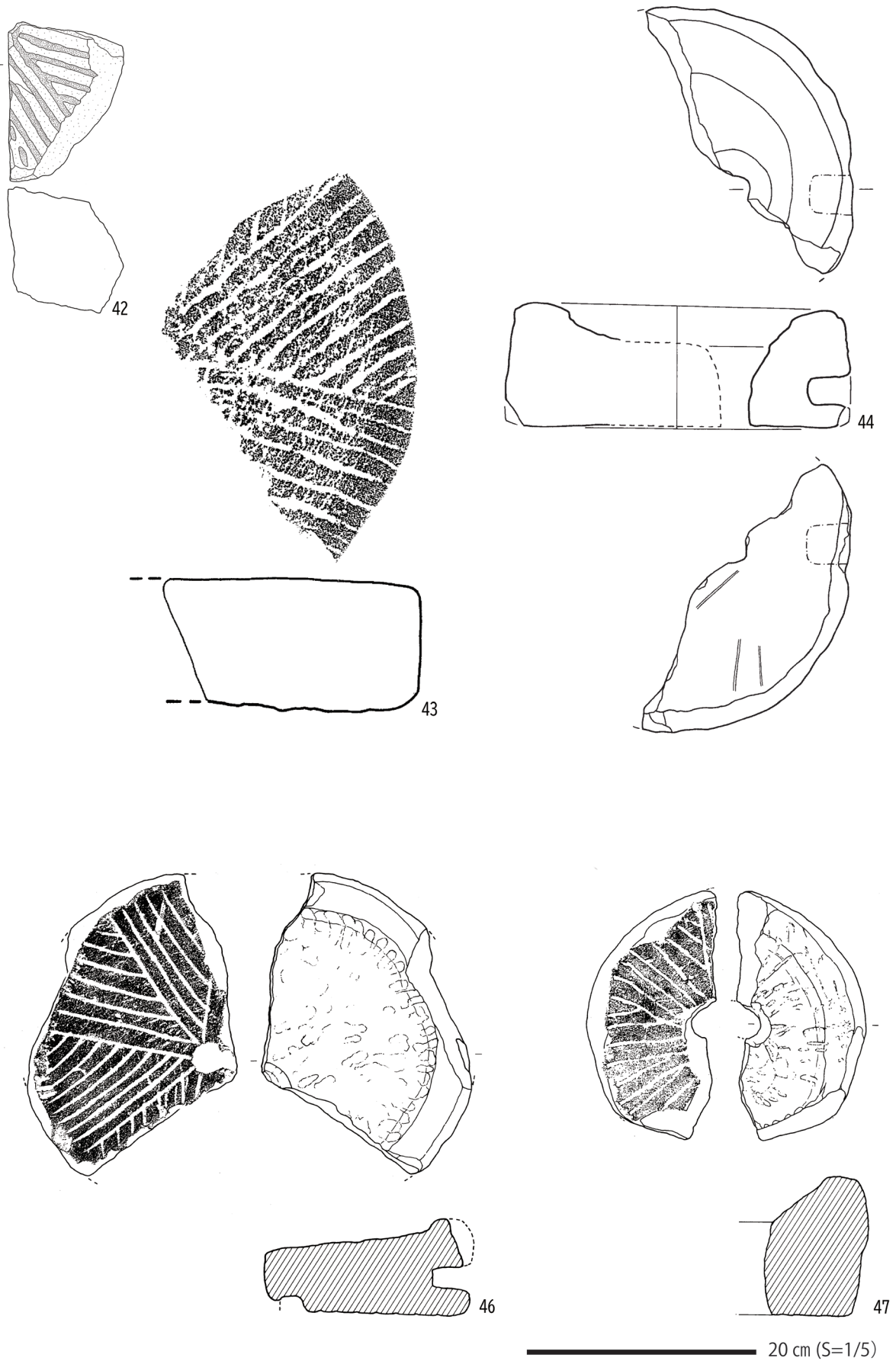


図 6 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図（4）

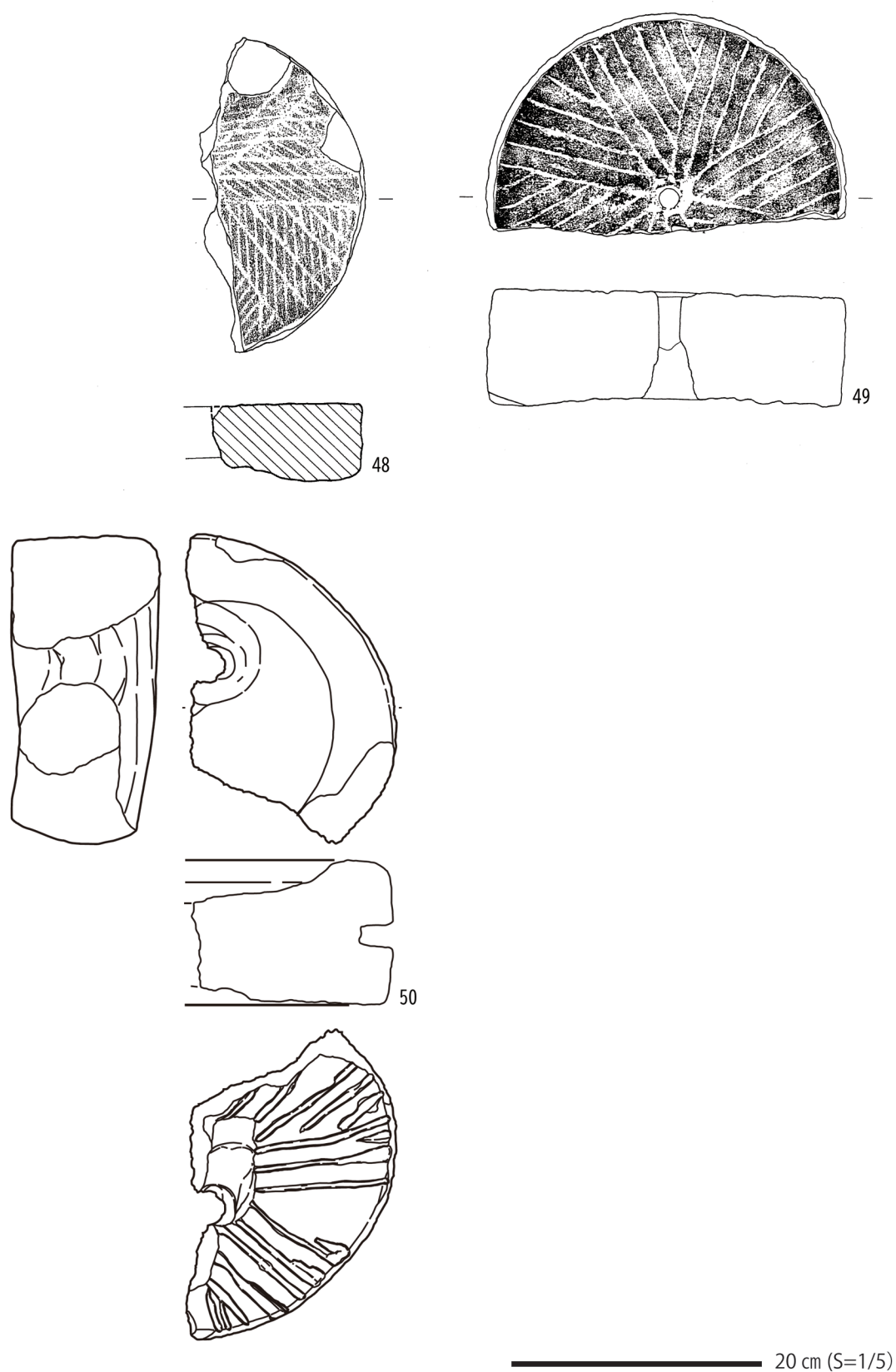


図7 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図(5)

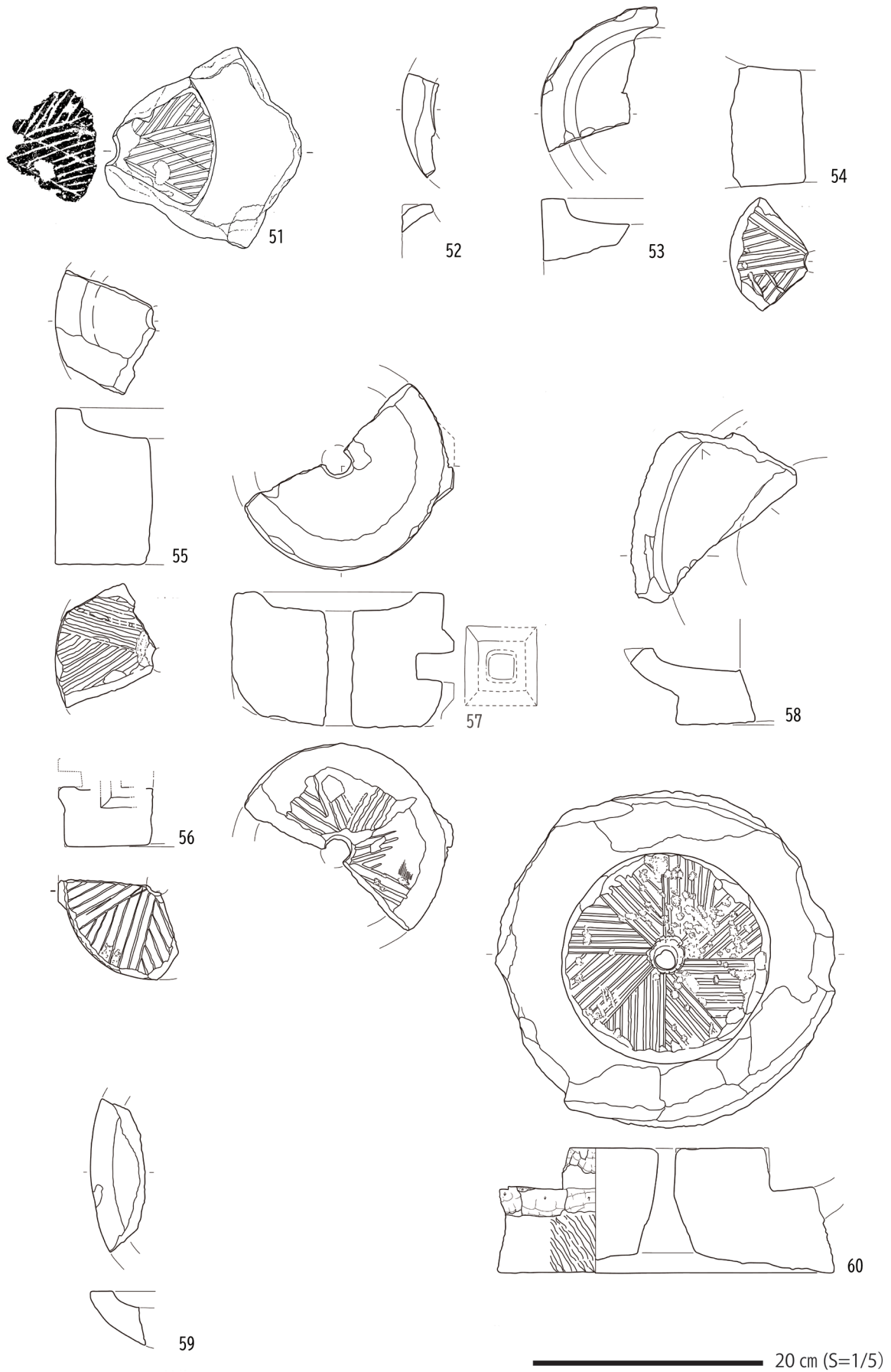


図 8 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図（6）

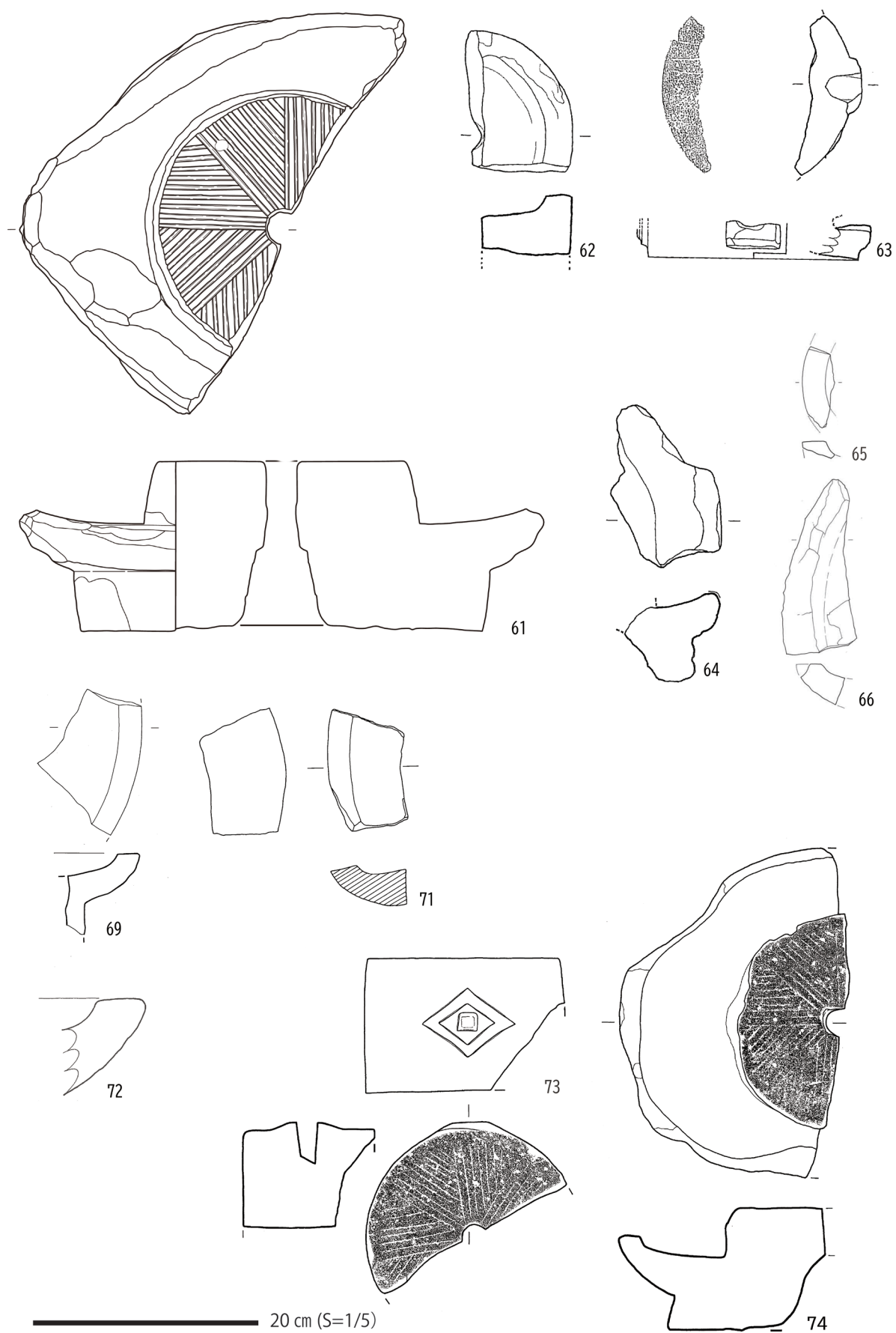


図9 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図(7)

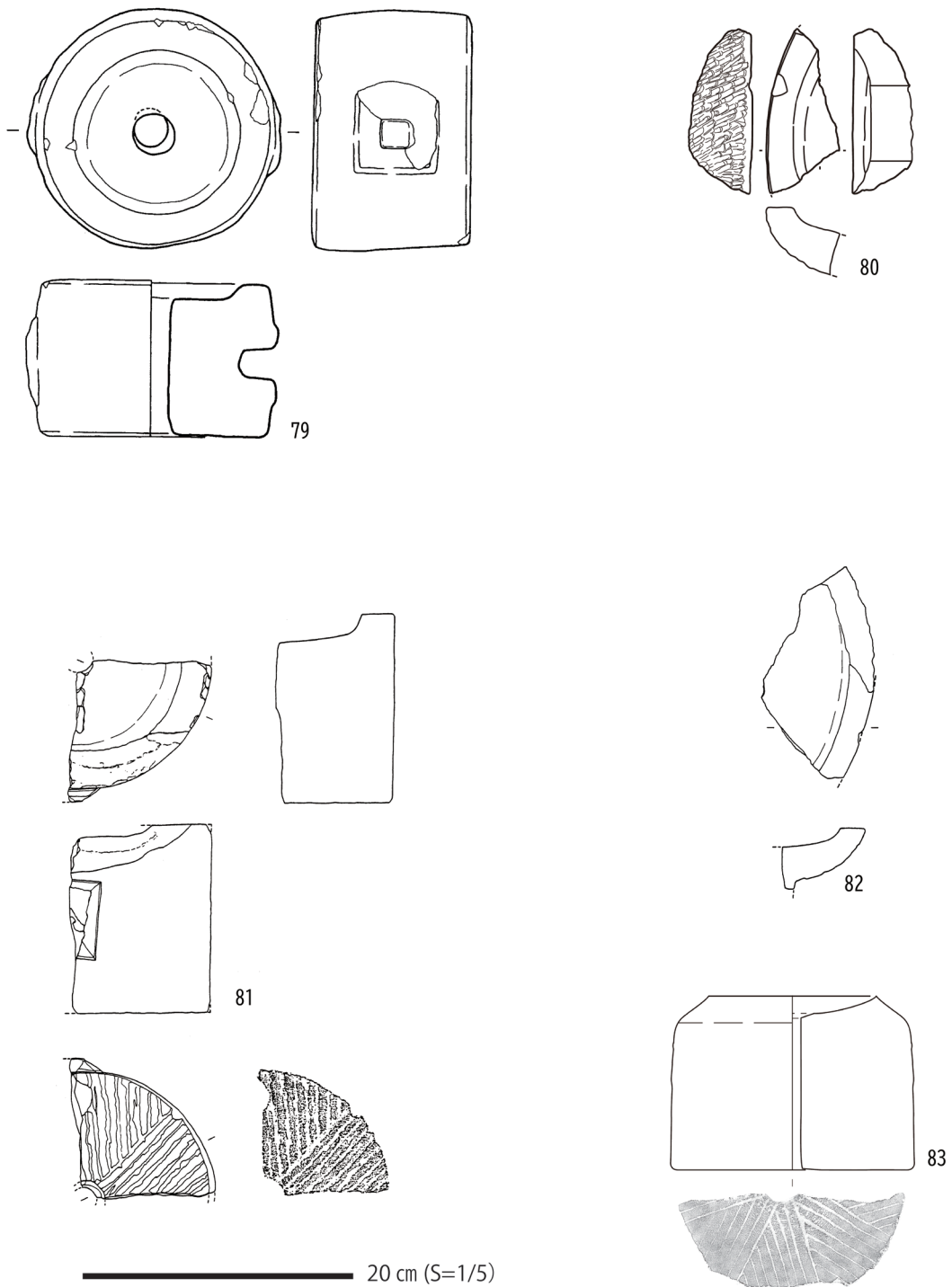


図10 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼実測図（8）



10 林遺跡 上臼
阿蘇溶結凝灰岩製。挽手穴の高さまで摩耗した臼面



30 湯牟田遺跡（二次調査）上臼
阿蘇溶結凝灰岩製。7破片を接合。ものくばりが明瞭



36 小山尻東遺跡 上臼
砂岩製。こぼれ目か。副溝 6 本と 1 本の区画あり



37 前原北遺跡 下臼
砂岩製。臼面に工具痕による目つぶしあり



40 上の原第2遺跡 上臼
砂岩製。（左）供給孔口周辺のみ赤化。（右）臼面の目が放射状に施されている



図 11 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼写真（1）



48 高岡麓遺跡 下臼
砂岩製。二重に目が施されている



51 林遺跡 下臼
唯一の花崗岩製。臼面に目つぶしあり



60 塩見城跡 下臼
砂岩製。受皿部は全周欠損。臼面は目つぶしと思われる敲打痕あり



70 本城跡 上臼
砂岩製。15.8 cmと小さめの臼面径



73 曾井第2遺跡 上臼
砂岩製。側面加工が非常に丁寧。台座文様は子持菱形



76 八幡遺跡 下臼
砂岩製。中央にあるはずの臼面が破碎により欠損

図12 宮崎県埋蔵文化財センター所蔵石臼写真(2)